

にらの稚苗定植による栽培について

1. 試験のねらい

にらは本県における水田転作野菜の主要品目の1つであり、栽培面積は増加傾向を示し、また、栽培農家の規模拡大がはかられている。このような中で、冬春どりの定植時期は6月下旬から7月上旬に集中しているので、定植期の拡大による労力分散を目的として、稚苗による早期定植の実用性について検討した。

2. 試験方法

品種はグリーンベルトを用い、稚苗定植は定植時期を5月15日(育苗日数50日)と6月7日(育苗日数73日)の2回とし、対照として6月26日定植(育苗日数92日)を設け、これに株当たり定植本数3、6本を組合せて計6処理区で試験を行った。は種は昭和60年3月26日に稚苗定植区はばら播きとし、対照区は条間15cmの条播きとした。定植は各時期に条間40cm、株間25cmの4条に行い、試験規模は1区2.0㎡(20株)2区制とした。施肥量は三要素ともa当たり成分量で4.5kg施用し、保温は昭和61年1月7日に開始して以降4回収穫した。

3. 試験結果及び考察

各定植時期とも定植後の活着、生育とも順調に経過し、特に生育初期は定植期の早いほど良好とみられたが、最終的な株養成期間中の生育は処理間にほとんど差が認められなかった。

茎数の増加割合は3本植区の方が6本植区より高い傾向が認められたが、収穫時の茎数は6本植区が多かった。定植期別では対照区に比較し茎数増加割合の高い稚苗定植の方が、収穫時の茎数は多かった。

収量は各定植期とも6本植区が3本植区より多収で、定植期別では6月7日植区が最も多収であった。6月26日6本植区対比、6月7日6本108、5月15日6本102、6月7日3本95、5月15日3本92、6月26日3本85の収量であった。

収穫時の葉幅は収穫回数が進むにつれ狭くなる傾向であったが、定植時期、定植本数間では大差が認められなかった(図-2)。

4. 成果の要約

冬春どり栽培における定植時期の前進化をはかるため、稚苗定植について検討した結果、5月15日定植でも6月26日定植と比較し、収量・品質とも劣らず、稚苗早期定植が可能と思われる。定植本数は茎数増加割合が高いことを加味し、4～5本程度が適当と思われる。

(担当者 野菜部 和田悦郎)

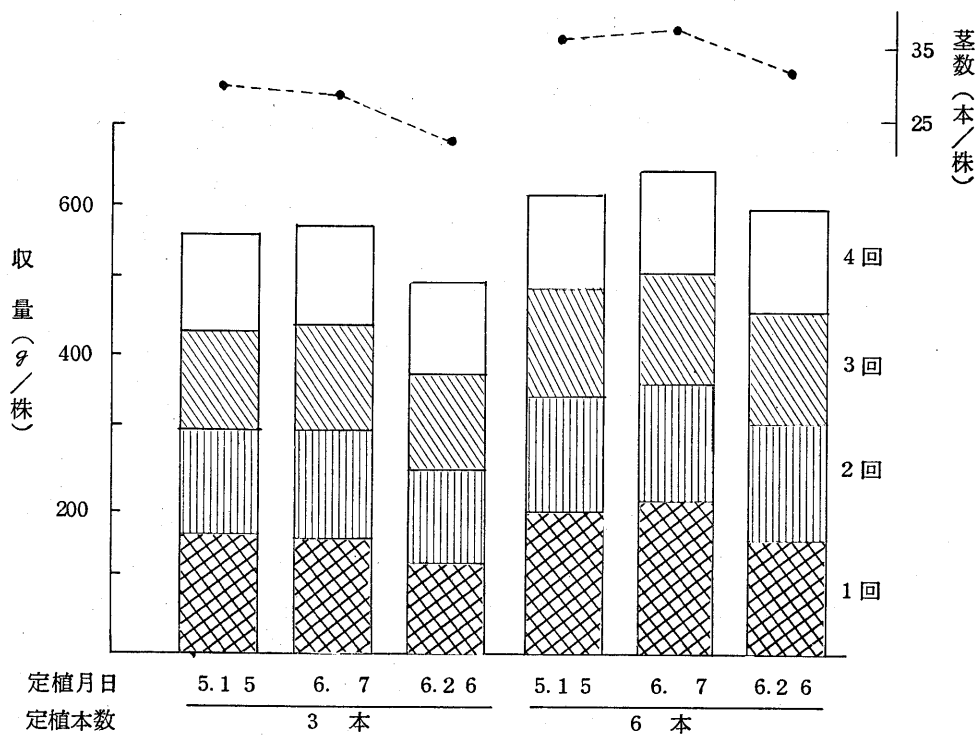


図-1 株当たり収量及び茎数

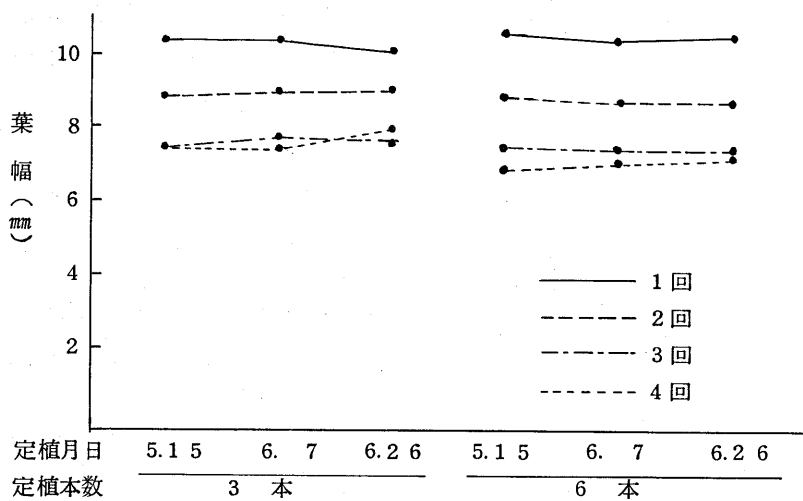


図-2 収穫時の葉幅